

バトンタッチがうまく行ったと実感できるのは先のことになるのだが、八月にお世話になったクライアントの方々に完全に引退することをお伝えして回った時に、何人かの方からは、後継を信頼して全てを託して身を引いたことを評価していただいた。企業の大小の違いはあるが、引退したといっても引き続き経営に口を出し、それが企業の革新力を失わせている例は少なからずあるようだ。

対外的に引退を宣言したあと、その年度いっぱいには、新経営陣のチャレンジに目を細めたり、眉をしかめたりしながら、残った現場に関わっているうちに時間は過ぎていった。ただ、年度が改まると状況は一変した。

やることがパタリとなくなったのだ。

そして引退してわかったのは、ひとは他者をつうじて自己確認することができ、生きていることも実感できるのではないか、ということだ。誰かがそのひとを高く評価してくれている。誰かがそのひとを必要としている。誰かがそのひとに感謝をしている。誰かがそのひとが居てくれることで心が安らぐと言ってくれる。誰かがそのひとに会うことで笑顔を浮かべる。どんな些細なことでも、他者という鏡に映ることで、自分の存在を確認することができる。そう感じたのだ。

もちろん他者を介さなくても自己確認できる力のある人はいるだろう。ただ、自分を振り返ってみると他者から評価されているという実感が、自分という存在がいることを確認できることに強く繋がっていると思われる。特に、長年にわたりまちづくりの仕事に関わってきたからおさらなのかもしれない。もちろん、まちづくりは私一人で何かができるわけではなく、そこには多くの人々がそれぞれの力を発揮することでまちはより良いと思われる方向に変わっていくのであるが、不遜かもしれないが、そこに私に関わるることによってはじめて何かが生まれたと感じることが少なからずある。それが私を支え、私が生きてそこに存在することの証として認識できたのではないか。

その機会がパタリとなくなったのだ。そのことが私を非常に不安にした。息が苦しくなる感覚を覚えたり、気落ちも不安定になった。今まで、まちづくりの仕事をつうじて得てきたものに私自身の存在確認があったら、それが無くなった今は何にそれを求めれば良いのか。

ボランティア活動に深く関わるという道もあるかもしれない。いわゆる趣味の世界に没頭するという選択もあるかもしれない。しかし理由は定かではなかったが、それらはどこかしっくりこなかった。

振り返ってみると今まででもそのような不安定な気持ちになったことは二度あった。そして、その都度、大きな決断をして強引に舵を切ることで乗り越えて来たのだった。そして今度で三度目になる。

一度目は、三十才になるあたりで、二度目は、それから二十年後の五十才になるあたり。そしてさらに十五年後の三度目。

